



ゆめ通信

2019.1.1. No.102

発行 日本養豚事業協同組合

〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10
八重洲早川第2ビル6階

TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

新年のご挨拶

日本養豚事業協同組合
理事長 松村 昌雄



新年明けましておめでとうございます。

5年間近く続いて来た高豚価にも陰りが見えて来ました。出荷頭数が大きく伸びている訳でもなく、豚肉の輸入量は前年並みで、18年1月～10月までを見ても76万8000トンと前年比1%しか増えてはいません。しかし食肉全体では（18年1月～10月）175万トンと2%以上の輸入増となっており、1Kg当たり450円近くまで下がってしまった豚価の原因は、豚肉の出回り量だけでは判断出来なくなりつつあるのではないかと思います。今後は牛、ブロイラー等との価格差が縮小されれば、末端での価格競争は増々大きくなり、豚肉は価格や美味しさ等について健闘しても、過去5年続いた高豚価はしばらく望めないのではないかと懸念します。ただし中国でのアフリカ豚コレラの広がりを見てみると、抑える事が不可能になりつつありそうな状況に見えます。このような状況が続くようになると、当然日本に侵入する可能性は最高の危険レベルにはなりますが、侵入さえ防ぐ事が出来れば、豚価の国際価格は上昇するのではないのでしょうか。豚価にばかり頼らない経営はいつの時代も重要なのです。

さて、とうとう8年間も我々を悩ませ続けてきたTPPにも決着がつき、昨年12月30日に発効しました。これによって養豚業界がどうなるのか？予想しがたい状況ですが、豚事協としては、今年も昨年以上に品質が良く経済性の高い商品の供給に努めて参ります。そして、更に内容を充実させた全国7か所の支部セミナーも実施して、会員の皆様方の経営のレベル向上のお手伝いをさせていただきます。

後継者育成塾では、第2期生が今年9月に終了します。第3期生もスタートする予定ですので、過去参加出来なかった方々からの参加も大いに期待しております。昨年の全国7か所での支部セミナーには、前年を上回る多くの皆様にご参加いただきました。JASVの先生方には大変お世話になりありがとうございました。7か所の支部セミナーに参加し、全ての会場から伝わって来た印象は“若くなった！”です。とにかく元気な若手の台頭を肌で感じました。豚事協組合員数431名と増えてきているのは、この若手達あつての結果と思っていますし、全員大きく育ててほしいと願っております。

今回、組合からの情報提供ばかりではなく会員からの要望を直接聞く機会として、各会場とも約1時間ずつ話し合いの場を設けました。残念ながら時間に遅れて来られた方もいらっしゃいましたが、今年は更に多くの声を聞かせていただければ、組合活動を更に向上させる事にも繋がりますので、ぜひ活発な意見交換の場にしていきたいと思います。

去年は、西日本豪雨、大阪北部地震、上陸した多くの台風、40度を超える猛暑、そして北海道胆振東部地震と、とにかく天災続きの大変な一年でした。まだまだ立ち直れていない会員もおられる事と思います。豪雨、台風、猛暑、どれも養豚経営にとっては厄介な事ばかりで、今年も安心してはいられません。国際競争も始まり（輸入関税の低下）、多くの難題が控えてはありますが、第19期も飛躍の年となるように更に前進して行きましょう。

九州支部セミナー・沖縄支部セミナー開催

18期九州支部セミナーは平成30年11月2日熊本市中央区辛島町に在るTKPガーデンシティネストホテルで実取孝祐支部長のしっかりと学んで有意義な時間を過ごしてほしいとの挨拶で開会されました。

松村昌雄理事長の挨拶では、今月豚事協の決算期を迎えるにあたって皆さんのおかげでしっかりとした決算ができるとの謝辞が述べられました。

「生産現場から見た繁殖成績向上のポイントと対策について」と題した有限会社ロッセ農場河瀬亮輔氏よりの講演では、候補豚育成、人工授精、妊娠期、分娩、授乳期、離乳の各ステージの生産性向上のための農場経験の中から把握された失敗や成功事例から導き出された飼育管理のポイントについての詳細が披露されました。

「事例紹介を踏まえた最近の疾病対策と繁殖成績の向上について」と題された株式会社バリューファーム・コンサルティング代表取締役呉克昌氏の講演では、最近の疾病対策では、アフリカ豚コレラの中国の発生状況が解説されたのち、国内養豚成功の鍵についてバイオセキュリティチェーン図を用いて要因が説明され、適正なビッグフローによる経営の安定化を図ることの重要性が述べられました。

また我が国の抗菌剤の使用量の多さに触れ、使用の多いPRDC（豚呼吸器病症候群）に含まれる重要なインフルエンザ、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）、マイコプラズマ肺炎、APP（豚胸膜肺炎）の詳細が事例を踏まえて解説され、豚の個体診断プログラムを利用した適正な抗菌剤の使用についてその必要性が提起されました。

一方、良質な離乳子豚の最少コスト生産を目論む繁殖成績の向上については①離乳子豚体重増加、②離乳時の母豚のBC損失減少、③受胎率向上、④産子数向上を図る授乳期用飼料の栄養強化、⑤候補豚管理とP35までのBCS適正化と子豚の乾燥・保温・初乳管理について解説されました。

時間一杯の講演に参加された方々の満足が垣間見えたセミナーは無事終了いたしました。

一方沖縄支部セミナーは平成30年11月22日沖縄県那覇市にある（一社）沖縄県教職員共済会八汐荘にて、金城栄支部長より沖縄の現状が話された後、講師の紹介を経て開始されました。

松村昌雄理事長の挨拶では、琉球飼料の飼料取扱量が1県としては驚異的な月間1,000トンを超えた販売がなされ、豚事協に大きく貢献されていることが報告されました。

「生産現場から見た繁殖成績向上のポイントと対策について」と題した有限会社ロッセ農場河瀬亮輔氏の講演では、十分な刺激を与え適切な発情確認を実施する人工授精期・給餌管理をポイントとする妊娠期・飼料の栄養成分と給餌量を管理する分娩期・確実な水分補給をポイントとする授乳期・産子数の多い種豚は里親の活用を重要とする離乳期、と繋がる繁殖サイクルの説明がなされ、繁殖豚の能力を充分に発揮させるポイントがステージごとに詳細に解説されました。

有限会社サミットベテリナリーサービス石関紗代子獣医師による「事例紹介を踏まえた最近の疾病対策と繁殖成績の向上について」と題しての講演では、豚コレラとアフリカ豚コレラの状況が説明され、根本解決のための疾病対策が示されました。

繁殖成績の向上に伴う管理技術として、ビッグフローを整えてオールインオールアウトを実現することの重要性が図を利用しながら分かり易く解説され、①同じ屋根の下で空気を共有する場所に異なるステージの豚が共存していないか、②發育不良の豚を残していないか、③豚舎の使い方を変えることはできないか、が考えるべきこととして提言されました。近年多産系母豚の導入が進み、産子数が増加し、肥育豚の生産性がアップしていることがグラフを用いて説明され、多産系種豚Topigsを例に分娩舎の管理・ボディコンディションの管理・子豚の管理・疾病の管理が表・図を示しながら解説されました。

将来に向けて、今、何をするかの問いかけを行いながらセミナーは終了いたしました。（山田）

飼料品質研究会開催

9月28日、八丁堀ホールにて通算では第9回目の“飼料品質研究会”が開催されました。この研究会は平成23年11月に第1回が開催されました。当初は組合員有志が飼料原料の種類や性格を勉強して配合率を作成するために始まったものですが、このときは2回ほど開催されたのみで、その後しばらく中断していました。

豚事協の「ゆめシリーズ」のマッシュ飼料については、コーン・ソイタイプ（トウモロコシと大豆粕を中心にして、多くの原料を使わない単純配合）の飼料として評価を得てきて、全国で1万トン超／月の販売数量を誇ってきました。しかし、これに加えて平成25年より飼料要求率（FC）の改善を目的としてクランブル飼料の販売が始まったことで、飼料の中身もコーン・ソイから他の原料も使ったコストダウンの飼料を指向すべきだとの考え方から、平成29年6月に後藤理事の呼びかけで若い人たちを中心とした勉強会として、理事会の決議を経て再度立ち上がりました。

再開当初は養豚の栄養に関しての基礎的な勉強から始まりました。ビタミンやミネラルは豚のサイズ別に飼料の中にどの程度含まれていればよいのかの勉強から始まりました。この“栄養要求量”については、ハイポーやケンボローなどハイブリッド豚の品種ごとに違いがあること、一般豚についても、国ごとに決めている要求量（日本飼養標準や、NRCの呼び名で一般的なアメリカの飼養標準）によっても栄養レベルがかなり異なることなどから勉強を始めました。また、配合飼料に使われている原料にはどのようなものがあるか。原料ごとの性格はどんなものかも勉強してきました。

同時に、当時は硫酸コリスチン（抗生物質）の飼料への添加が禁止されることが決まっており、それへの対応をどうするかについての検討がなされました。このときの結論は、わずか40ppm程度のコリスチンの添加量で子豚の下痢が収まっているとは言えないだろう、普段の管理が重要であり、コリスチン

が配合飼料からなくなっても大きな影響はないとの結論になりました。コリスチンがなくなってほぼ1年が経った今振り返ってみると研究会のメンバーの判断は慧眼だったなと思います。同時に混合飼料「マミーB」のリニューアルを検討しました。これについてはミネラルとカビ毒吸着剤を併せて配合した「マミーA」として販売することを理事会に提案し、販売を開始しました。現在では、この商品の販売量は5.5トン／月（直近3ヶ月平均）で豚事協の商品として定着しつつあり、豚事協の業績改善の一助となってきています。

ここ数回は、飼料会社の配合担当の専門家に講師をお願いし、自社農場のベンチマーキングの成績結果から計算して、各農場に合った肥育用配合飼料の栄養価はどのレベルがいいのか計算式から判断して要求量を決めることを勉強しています。数学の得意な人はいないようで皆さんなかなか苦労しているようですが、これから暫くはこの勉強を継続して、将来的には配合率を組めるようになって頂きたいと考えています。配合率を組むためには成長に関する数字を捕まえることだけが重要なのではなく、栄養の決め方（栄養制限）、原料の使い方（原料制限）、原料の供給量の制約（原料供給制限）、クランブル（ペレット）化に必要な原料の最低配合率など、覚えておかなければならないことは沢山ありますが、メンバーの方々には頑張っていただきたいと思います。

飼料メーカーで配合率を勉強している専門家でも十数年かけてようやく一人前になれるような、多くの知識を吸収していただかなければなりません。とても難しい内容ではありますが、養豚の生産コストの5割を占めると言われる飼料の性質を知ることが経営改善に直結する知識を得ることに繋がり、とても重要で興味深いものでもあります。これから自農場を担っていく若い後継者で、私たちと一緒に勉強する希望のある方がいらっしゃいましたら、是非事務局までご連絡ください。組合員の皆さんも長い目でその成長を見守ってあげてください。（矢嶋）

Topigs研究会開催

平成23年11月の第1回Topigs海外研修の報告会を基礎にして、翌24年より毎年1回Topigs研究会が開催されるようになり、今年で6年が経過しました。この間、第9期（平成21年）に7農場に352頭のPSを試験導入して始まった豚事協でのTopigsの販売頭数は、18期実績では2,731頭（GP247頭、PS2,484頭）を数えるほどになり、豚事協の事業の柱として成長しました。

第1回Topigs研究会は参加者が12名と細々と始まりましたが、種豚の優秀性が認められTopigsの販売頭数が増加するに従い参加人員も増えてきて、今回は78名の参加（組合員及びその従業員34名、賛助会員など44名）となりました。研究会の発表内容は第16期（平成28年）からはTopigsの若雌の育成方法や分娩舎管理など実務管理に焦点を当ててきましたが、今回もそれを踏襲したうえで、特に若雌の育成に焦点を当て実務担当者研究会としました。発表者は有限会社マルミファームの稲吉克仁社長、有限会社ロッセ農場の河瀬亮輔チームマネージャーにお願いしました。どちらも日本でトップクラスの成績を誇る農場の発表なので聞く方も質問の内容も真剣でした。

まずマルミファームの稲吉社長に「Topigs導入後の成績改善経過と母豚の産次別成績から見る母豚育成の重要性」と題してご講演頂きました。母豚の産次別離乳頭数や子豚の離乳体重は6産がピークになっているが、離乳頭数が多く、子豚離乳体重も大きいため、6産まで持たせるにはやはり育成が特に重要であるとのことでした。初回交配の若雌の生存産子数は、若雌の体重が230kg以上なら増加するが以下なら減少してしまうなど、数値で示されているのと、マニュアルに示されている目標に合った育成ができれば母豚もTopigs Norsvin社の言う成績を体現していることが示されていて、とても分かり易い発表でした。

ロッセ農場の河瀬氏の講演は、ロッセ農場がインジーン契約でGPの生産から手掛けていることで少し受け取る感覚は違っていたようですが、年間50,000頭が出荷目標の農場で、母豚数が2,000頭超から1,800頭強ま

で減少してもTopigsなら50,000頭の出荷ができていたとのことで、やはり分かり易い説明でした。特に育成期に繊維を多給することで死産子豚の減少に繋げられること、適正な体重管理が確実な発情誘起につながることなど、当たり前ではありますがなかなか実践されていないことの重要性を説明されていました。

研究発表2題が終了した後はパネルディスカッションの場に討論を移して、飼育管理者間での疑問・質問をぶつけあう場としました。ここでも主題は若雌の育成方法におきました。質問者には従業員の方が多く、回答者は管理者だったことなどから、質問も現場に即した内容のものが多く、回答者のパネラーの方々は慎重に回答していたようでした。パネルディスカッションも多くの方が質問し、それぞれが答えを模索していて有意義な時間だったと思います。パネルディスカッションの時間が40分では短かったようで、質問も答えも尻切れトンボになってしまったのは事務局の司会の落ち度でした。次回からはもう少し考えて司会するように致します。ただ、事務局としてもそれくらい活発な意見交換の場を提供できたことは本望です。

その後の懇親会の間でも質問と応答が絶えずあり、パネラーとしてお迎えした日の出物産の森川氏、フィード・ワン研究所長の川崎氏、細川農興（秋田）の細川氏のお三方も答えるのにてんてこ舞いの様でした。有難うございました。（矢嶋）



豚事協若手経営者育成塾第5講座開催

平成30年11月6日AP浜松町Dルームにおいて、稲吉弘之塾長の挨拶で豚事協若手経営者育成塾第5講座が始まりました。

はじめに、東京大学食の安全研究センター長関崎勉氏より養豚をめぐるリスク管理その副題として①食肉をめぐる微生物リスク、②労務管理としての衛生対策、③リスクコミュニケーションとリスク管理が講義されました。

食肉をめぐる微生物リスクでは、人畜共通感染症であるE型肝炎、腸管出血性大腸菌、サルモネラ症、豚レンサ球菌症等の説明がなされ、特に豚レンサ球菌症における感染者への被害の悲惨さを写真で示しながら披露されました。

労務管理としての衛生対策及びリスクコミュニケーションとリスク管理では、家畜の衛生管理ガイドラインが示され、①病原体についての知識、②感染・発症を未然に防ぐ方法と手順、③事故発生時の対応、④自己終息後の改善策等の飼育従事者への教育訓練（リスクコミュニケーション）の重要性が説明されました。

続いて、養豚をめぐるリスク管理の養豚経営に関わるコンプライアンスと題して関連する法令、労務管理がジャパンファームホールディングス取締役中屋修氏より講義されました。

関連する法令の把握とコンプライアンスの重要性が具体的な事故事例とともに資格取得の必要性が紹介され解説されました。

翌、平成30年11月7日は、最初に竹延哲治理事より生産性の追求よりもコンプライアンスの遵守が優先するとされるコンプライアンスに関する実際の経験に照らし合わせた考え方が披露され、一つ一つの問題提起に塾生の皆さんは聞き入っていました。

講義に移り、養豚をめぐるリスク管理の5Sの実践と効果及び最近の獣医療トピックスについて(有)サミットベテリナリーサービス獣医師石関紗代子氏より講義されました。5Sの定義（整理、整頓、清掃、

清潔、しつけ）と具体的な取り組み方が図や写真を使用しながら解説され、また外国の事例も紹介されました。最近の獣医療トピックスについては、最近の課題である国内で発生した豚コレラと中国で蔓延しているアフリカ豚コレラについてウイルスの特徴・伝搬経路・ウイルスの生存性・感染対策等が詳細に説明されました。

さらに、日本政策金融公庫営業推進部グループリーダー植田和典氏より金融機関との付き合い方と題して講義されました。

①目標を共有し、一緒に課題を解決するパートナーとしての企業と金融機関との関係、②金融機関が取引先に期待する経営の透明性、③借入相談のポイントは現在の姿を分析し目指す姿を示すこと、④事業の将来性を大きく左右する経営者能力と今後の経営展開の根幹である形成戦略について重点的かつ積極的に評価する事業評価とは何か、⑤取引先金融機関を選ぶポイント、について分かり易く解説されました。

午後の講義では、(株)トラフィックエイジア代表取締役外波達也氏より財務・会計の基本を学ぶと題して、財務諸表の読み方及び会計の基本について講義されました。

会計を理解してでは、財務会計と管理会計の違い、貸借対照表、損益計算書、キャッシュフローの概要が講義され、試算表の演習が行われ講義は徐々に深まっていきました。

事業のデザインである決算書を読むコツが示され、経営管理に必要・有効な情報を提供する月次決算と次の期間に繰り越す資産・負債・資本を決定する年次決算の相違、予算作成の必要性和効果、損益分岐点の求め方等が講義されました。

普段では眠たい会計に関する授業が、冗談を織り交ぜながら演習を行うなど、あっという間に午後の半日の長い講義が終了いたしました。（山田）

Dr. 伊東の
ランダム
シンキング

第9回 社会生活での基本ルール考② ～正しい日本語表現に思う～

伊東 正吾

最近、といっても既にかなりの年月が経過していますが、私たち日本人が社会生活を営む上で最も基本となる言葉・日本語におけるルールが大きく乱れてきていると感じているのは、著者だけではないと思います。

昨年は広辞苑が改訂されたこともあり、言葉の乱れ問題などをマスコミ等が取り上げる機会も多くなり、日本語の現況が再認識させられたように思います。

堅苦しくて古い言い方かもしれませんが、「言葉の乱れは社会の乱れ」と言えると強く感じていますので、社会のルールを考える一環として今回述べたいと思います。

1. 言葉の基本法則に思う

例えば、私のような戦後の復興期世代では、学校では「全然（ぜんぜん）…」という表現をする際は、その後に続く文章は否定形であることが基本ルールだと教わり、そのように使ってきました。しかし最近では若者のみならず、熟年・高齢者も、さらに、言葉を専門にしているアナウンサーまでが「全然、大丈夫です」と、放送中に平然と話すのを見聞きすることの多いのが実情です。

比較的まじめ？な（頭が固い？）私は、このような場面でいつも違和感をいだき、「その使い方は、日本語を冒瀆するものである！ 専門家としての誇りはないのか！」と、少し大げさに言えばそのくらい憤慨していました。しかし、ある時調べ物をしていると、「全然…以下は肯定文」は、言語学的には間違いでもなく、夏目漱石など文学・言語学に精通して活躍し

ていた時代には、必ずしも否定文を必要としていなかったとの記述を目にし、愕然としました。また、「全然」の後には否定文が来るという前提は、昭和20年頃から広がった神話だとの一説も見かけるに至り、頭の整理がつかない状態になりました。

私は思わず、「ナンタルチア！」と叫ばずにはいられませんでした。夏目漱石まで出てくると、私はシブシブ黙るしかありませんでした。

「歌は世につれ、世は歌につれ」とは言いますが、確かに、言語は生き物ですから時代の流れで変化することも判らないではありません。実際に、最近の若者言葉が「現代語辞典」などに組み込まれてくる現状を見れば、今さら盾突いても仕方のないこととは思います。しかし、日本語が単なる流行やご都合主義で簡略化使用され、なし崩し的に基本が崩されて本来の日本語の美しさを失うことだけは回避してほしいと、切に切に、切に願うのみです。

本来の表記を短縮して使う場合、短縮語から本来の表記や意味が比較的容易に想像できる程度であることが望ましいと私は思っています。例えば、「さようなら」は「左様ならば、これにて失礼します」の短縮と言われ、「こんにちは」は「今日は、良いお日柄ですね」が短縮変化したと言われています。できれば、このような変化にとどまっていた欲しいものだと思います。特に最近の若者言葉やギャル語？ JK語？などは、皆目意味不明である以上に美しさのかけらもないと感じています。この段階で「言葉の乱れは社会の乱れ」というのは少し乱暴かも知れませんが、最近の日本社会での各種社会問題を俯瞰する

と、つつい結びつてたくなってしまう私です。

2. 現在形と過去形

「全然OK」などとともに私が気になっている言葉使いには、「ありがとうございますます」と「ありがとうございました」があります。

テレビ中継などで、実況中継の最後に現地からの「…以上、現場からお知らせしました」を受けた際、MCタレントだけでなく専属アナウンサーでも「ありがとうございますました」ではなく「ありがとうございますます」と返していることがしばしばです。

細かいことかもしれませんが、私はこの点についても、強い違和感を覚えています。一連の事象が終わった時点での受け答えですから、本来ならば過去形で返すべきだと思っています。

この点について明確にしたかった私は、以前、依頼を受けて出演したNHKのディレクターに問いかけてみたところ、貴重で考えさせられる以下の返答をいただきました。

結論から言えば、「ありがとうございます」と使っている場合は、「感謝の気持ちがが続いている」という意味合いで使う場合が多いこと、また、基本的には「文脈に合わせて使い分けるのがベターだと考えている」というものでした。

回答の中の一例では、最近ではなく、かなり以前に亡くなった落語の大師匠が、「ありがとうございました、と言うと、『もうお前は感謝の気持ちを持っていないのか、感謝の気持ちは過去のものなのか』と言われてしまう。だから『ありがとうございます』を使うのだ」という意味のことを発言されていたと紹介していただきました。

人それぞれの考えがあって良いとは思いますが、この師匠のような気持ちにも対応するとともに、正しい日本語を使うべき立場のマスコミであれば、例えば実況中継の最後の締めくくりは、「ありがとうございました。今後もよろしくお願いします」などすれば良いことだと私は思っています。

過去、現在、未来をきちんと表現することは、言

葉で成り立っている一般社会の中では極めて重要な行為であり、日頃から、細やかに対応すべきだと私は考えます。また、上記ディレクターからの回答にある、文脈に合わせて使い分けるという表現は十分理解できますが、実際に使う場合、やはり基本的ルールを踏まえているか否かで大きく変わってしまいます。私達日本人が普段から無意識的に使う日本語ですが、やはり常に基本的ルールを意識したうえで使うようにすべきだと、面倒くさい性格の私は考えてしまいます。

私自身は、人気番組の主人公の口癖ですが、「些細なことが気になってしまう私の悪い癖」のように、夫婦や家族内ならともかく、例えば政府・議員や組織から広く情報を伝える立場では以心伝心に頼ることは間違いであり、正しい日本語でのみ周知するように努めることが最低限の義務だと考えています。きちんとした表現で伝えないと、誤解が誤解を招くことになると思っています。特に政治家や公的機関は、一般市民に発する言葉に絶対的責任を持つ義務があると考えます。それができなければ、該当者は辞任などをすべきだと考えます。

3. 最近の山の仙人の思い

退職後、自分の世界に浸りきった生活をしている私は、時間的余裕だけはありますので国会中継を見ていることが多いのですが、ここ3年ほどの間だけでも信じられないような事件が発生し、多額の国税を投入している国会などで情けないほど低レベルな質疑応答が延々と続き、最終的には納得のいく成果もほとんど得られず正もできない尻切れトンボ状態で終わっている現在の日本国を憂うのみです。

かみ合わない質疑応答、口から出る意味不明な日本語、口から発せられる上滑りな発言は国家の悲劇であり、歯がゆく、悲愴感しか残りません。

改めて、正しい日本語と真摯に向き合い、誠意ある行動に心がけるべきだと強く感じていますし、そのためには、正しい日本語を再認識して範を示すべきだと考えます。

五十嵐ファーム天皇杯等三賞 「日本農林漁業振興会会長賞」受賞

山形県鶴岡市に所在する(株)五十嵐ファームは養豚（母豚100頭の一貫経営）を軸に稲作6.0ha、アスパラガス栽培2.5haの複合経営を行っており、養豚で産出される糞尿は田んぼやアスパラガスの圃場に還元する地域循環型農業を確立しています。

(株)五十嵐ファームの養豚は、(有)サミットベテリナリーサービスが指導する最新のベンチマーキング結果によると、稼働母豚は107頭であり、自家配合を実施している飼料は飼料用米と米菓が約半分を占めコスト低減を図り、売上高に占める飼料費の割合は従来2分の1を超えていたものが、現在は3分の1に改善されています。

母豚の品種は大半がTOPIGSであり、年間1母豚当たりの出荷頭数は27.3頭と増加し、枝肉生産量も2,000kgを超えており、その収益性の高さが伺えます。

販売面でも「庄内豚」のブランドで販売する等、きめ細かい経営を行っています。

養豚経営のスタッフは五十嵐夫妻と雇用者2名、後継者にも恵まれ今以上の成績の向上を目指しています。

平成30年11月23日行われた平成30年度農林水産祭において天皇杯受賞者、内閣総理大臣賞受賞者、日本農林漁業振興会会長賞受賞者が7部門から各1名が選定されました。

天皇杯等三賞は、農林水産祭中央審査委員会において、過去一年間の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞した者（512件）の中から、7部門（農産・蚕糸、園芸、畜産、林産、水産、多角化経営、むらづくり）毎に、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞の選賞及び女性の活躍について、内閣総理大臣賞及び日本農林漁業振興会会長賞が決定されます。

昨年の中央畜産会主催の平成29年度全国優良畜産経営管理技術発表会で日本養豚事業協同組合推薦により審査された(株)五十嵐ファームが農林水産大臣賞

を受賞し、さらに本年の農林水産祭において日本農林漁業振興会会長賞を受賞されました。

(1) 高い生産技術とそれを支えるベンチマーキングによる経営の可視化

平成25年から多産系の種豚の導入により、母豚1頭当たりの年間分娩回数2.49回、年間離乳頭数27.6頭、年間枝肉出荷重量2,160kgを達成するなど、飼養成績が向上した。また、自家配合施設で飼料用米等を利用し、飼料費を大幅に削減した。このような高い技術水準と高収益性は、ベンチマーキングの解析結果に基づき自身の経営を客観視し、経営改善に努めた結果と評価できる。

(2) 循環型農業の実践

五十嵐氏は循環型農業を志向し、養豚経営で発生する堆肥及び液肥をアスパラガス栽培、水稻栽培に有効に活用している。

(3) 地域社会への貢献

養豚で2名、アスパラガス栽培で13名を地域から雇用し、地域に雇用の場を創出している。また、生産された豚肉は、「あつみ豚」、「桜美豚」として、アスパラガスとともに地域食材として定着しており、観光振興にも貢献している。

上記3項目が選定理由とされ、さらに普及性と今後の発展方向については、ベンチマーキングによる経営、技術の可視化と新規技術の積極的な導入など、高い生産性・収益性の養豚経営モデルとして普及性が高く、地域に根ざした循環型農業の展開は、複合化とともに地域の活性化に資するものと期待できると評価されました。

五十嵐ファームは現状に満足することなく、一層の地域貢献と地域循環型農業の確立及び母豚1頭当りの出荷頭数・枝肉生産量等の生産性の向上を目指した将来を見据えて日々邁進されています。

（山田）

賛助会員のご紹介

共立製薬株式会社

～人と動物の明日をつくる～

会社概要

設立／昭和30年
資本金／5,500万円
代表者／代表取締役社長 高居 隆章
所在地／本社 〒102-0073 東京都千代田区九段北1-11-5
事業内容／畜水産動物用医薬品および伴侶動物用医薬品の製造、販売、輸出入
お問合せ先／TEL 03-3264-7559・FAX 03-3264-7508
PA営業本部
URL／<http://kyoritsuseiyaku.co.jp>

私たち共立製薬では、営業担当者全員が農場HACCP指導員の資格を取得、また最近では、JGAP指導員資格の取得も始めました。家畜・畜産物を生産されるお立場としての果たすべき役割をサポートさせていただき、生産者の皆様と良きパートナーとして経営のお役に立てる営業活動に邁進しております。

行政の動向では、2018年6月に改正食品衛生法が衆議院本会議で可決、6月13日に交付されました。HACCP制度化の対象は、食品の製造、加工、調理、販売等を行う全ての食品等事業者で、「と畜場」など、畜産物に関係する事業者も含まれます。これからの衛生管理は、家畜の食品としての安全性を基本とし、農場から処理・加工場まで一元管理された衛生管理が問われることとなります。本年9月岐阜県の養豚農場において、26年ぶりとなる豚コレラの発生が確認されました。加えて、中国ではアフリカ豚コレラが確認され、感染が拡大しています。

これらの家畜伝染病を発生させないためにも、生産者の皆様におかれましては、改めて、日頃の農場防疫体制を再確認され、畜舎の整理整頓、車両の消毒や靴底消毒の徹底、農場立入記録の管理など、農場防疫の強化及び継続的な取組みが求められます。

今度とも皆様からご指導賜り、皆様と共に成長していきたく思います。より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新商品のご案内



フェンベンダゾール散「KS」1%、2%



豚用コクシックス 100ml、250ml

東亜薬品工業株式会社

～健康の源は腸にあり～
プロバイオティクスに出来ること

会社概要

設立／昭和23年1月
資本金／7,000万円
代表者／代表取締役社長 増田 隆
本社／東京都渋谷区笹塚2丁目1番11号
事業内容／医薬品、医薬部外品、動物用医薬品、飼料添加物、混合飼料、化学工業薬品、医療用具、化粧品、食品、日用雑貨の製造・販売・輸出入
お問合せ先／TEL 03-3375-0511・FAX 03-3375-0539
URL／<http://www.toabio.co.jp>

東亜薬品工業株式会社は、創業70周年を迎え“健康の源は腸にあり”をスローガンにプロバイオティクス（生菌剤）を通して人々や動物の健康と社会の発展に貢献いたします。

養豚製品としては、動物用医薬品では生菌製剤の「動物用ビオスリー」、消化機能障害治療剤の「ビオペア」、解熱・鎮痛・抗アレルギー剤の「ネオアス注射液・ネオアスP」をはじめ、混合飼料では、「ビオスリーPZ」、「飲水用ビオスリープラス」、「子豚三兄弟」及び豚用精液希釈保存液用粉末の「ビタセムZ」を展開しております。

弊社の生菌剤菌末は、アメリカFDAにも対応できる国内の最新培養工場で製造しており、安全、安心で高品質な製品供給に努めております。

“One Health”の考えの下、薬剤耐性（AMR）対策において生菌剤は、抗菌性飼料添加物の代替品として世界的にも注目を集めています。ビオスリーは、豚の健康を維持し、腸内細菌叢を正常に保つことで、免疫力も維持し、生産性の高い養豚をお手伝いします。

これからも、養豚現場における生産性の向上、安全・安心で高品質な生産物作りにお役に立てるよう、試験データを積み重ね皆様に有用な情報をご提供致してまいりますのでよろしくお願いいたします。



培養棟



ビオスリー PZ

豚事協共同購入事業資材のご案内

電熱断尾器

本体価格：9,000円 ※税・送料別

仕 様：100V用・200V用

製 造 国：中国

特 徴：操作が簡単で、しっかり止血できるのが魅力です。
従来の中国製の電熱断尾器は壊れやすいと言われて
いますが、これは丈夫です。



●●● 第18回通常総会開催のお知らせ ●●●

第18回通常総会を下記の要領にて開催致します。詳細は別途ご案内申し上げますが、多くの組合員の方々にご参加いただきたくお願い申し上げます。

開催日時 平成31年2月22日（金） 午後1時30分～

開催場所 学士会館

住所：東京都千代田区神田錦町3-28 TEL03-3292-5936

交通：都営三田線／都営新宿線／東京メトロ半蔵門線「神保町」
駅A9出口から徒歩1分

東京メトロ東西線「竹橋」駅3a出口から徒歩5分

JR中央線／総武線「御茶ノ水」駅から徒歩15分

議 案：◆第18期事業報告、決算（案）の承認

◆定款変更決議

◆第19期事業計画案の承認

◆経費の賦課徴収方法の決定

総会終了後、基調講演（予定）および懇親会を行います。

アクセス：

羽田空港から



※会場が変更になっております。ご注意下さい。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。2019年は十干が己、十二支が亥で、己亥年です。野生の猪を飼い馴らし家畜化したものが豚であると言われてはいますが、「亥」が「猪」であるのは日本だけ、中国などでは「亥」という漢字は「豚」を意味し、「亥年」は「豚年」という意味だそうです。豚年！養豚業界の年?!万病を予防すると言われる栄養価の高い猪の肉は「無病息災」の象徴とも言われています。美味しい国産豚肉を沢山食べて、みんなで元気に養豚業界を盛り上げて、12年に一度の「亥年」を良い年にしましょう！

豚事協は昨年12月から第19期に入りました。高相場が終了、昨年12月にTPPが発効、今年2月にはEPAが発効予定、国内では豚コレラが発生し、中国ではアフリカ豚コレラが広がるばかりで、なにかと不安は尽きませんが、一方で日本の養豚は養豚先進国とも競争出来る技術を身につけてきています。養豚を取り巻く環境は他国も一長一短、全てにおいて恵まれているというところはありません。要は考え次第。勝ち残る養豚経営を確立すべく猪突猛進するしかありません。豚事協も組合員のみなさまの経営のお役にたてるよう努力してまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。（東）